

第 3 4 回 COMNAP (南極観測実施責任者評議会) Annual General Meeting 報告  
極地研究所 中村卓司、橋田 元

COMNAP は、2022年4月～7月に複数回のセッションからなるオンライン会議を開催し、7月27日の年次総会(代表者ビジネス会議)をもって終了した。

【年次総会】

各セッションには、36のCOMNAPメンバー国・オブザーバー組織と4つの招待組織から266名の代表者が登録した。年次総会では、カナダの加盟申請について審議を行い、カナダの南極プログラム実施機関であるPolar Knowledge Canadaを代表として加盟することが合意された。Polar Knowledge Canadaが世界有数のカナダ高緯度北極圏研究ステーション(CHARS)などを通じて、国際的な協力のもと、長年にわたって北極・南極研究プログラムを推進していることが評価されたものである。

【地域別分科会】

南極半島、ロス海、東南極、ラルスマンヒルズ、ドロンイングモードランド、内陸の6つの分科会を7月25日～27日に開催し、各国の2022/23年シーズンに向けての事前情報を交換した。ほとんどの国が、科学研究とその支援活動をパンデミック前のレベルに戻す意向であることを確認した。主要なトピックは、次の通り。

- ・ 老朽化した施設の環境性能を向上させるインフラの近代化に関する大規模なプロジェクトは継続される。
- ・ 最古級の氷床コア掘削計画を含む内陸プログラムのためのトラバースが計画されている。
- ・ いくつかのプログラムでは、海洋研究の可能性を飛躍的に高める新しい砕氷船に関する先進的な機能が紹介された。

【COVID-19等の影響】

2022/2023年の南極シーズンについては、COVID-19の世界的な流行が続いているため、その準備を整え、観測隊員の安全と健康を守るための手順を、状況に応じて機敏に実行することが求められている。これらの手順は、SCAR/COMNAP 合同医療医学専門家グループや、COMNAPのCOVID-19特別分科会を通じて情報提供されている。また、世界的なサプライチェーンは引き続き影響を受けており、燃料費の高騰は南極観測のコスト上昇に繋がっている。地域分科会でも、これらの問題について議論し、様々な課題に共同で対処する方法を検討した。

【専門家グループ会合】

安全、航空、海洋プラットフォーム、環境保護、先端重要技術、教育・アウトリーチ、訓練、科学推進、多様性・包摂性、医療・医学は、専門的なトピックの一部に過ぎないが、6月に8回の専門家グループ会合を開催し知識の共有や議論を行った。主な話題は次の通り。

- ・ 2022年開催の南極条約会議(ATCM) XLIVに対して、COMNAP南極航空ワークショップ2022の成果に基づく航空安全の提言を行い、ATCMはその提言を受け入れて、「決議3(2022)南極における航空安全」に反映させた。
- ・ COMNAPメンバーは、南極で活動する誰もが安全で尊重され、歓迎されていると感じられるようにすることを確認する Welcoming the Power of Diversity within our Membership と題した方針案を承認した。
- ・ 新たに、効率化タスクフォースプロジェクトと地震・津波・火山現象監視プロジェクトを設けた。

【執行部体制と2023年年次総会】

議長の Antonio Quesada (スペイン極地委員会) と5名のCOMNAP副議長、Charlton Clark (オーストラリア南極局)、橋田元(国立極地研究所)、Pavel Kapler (チェコ南極研究計画)、Dragomir Mateev (ブルガリア南極研究所)、Patricia Ortúzar (アルゼンチン国立南極局)、および、Michelle Rogan-Finnemore (事務局長) は、任期を継続する。

2023年に第5回南極SAR(Search & Rescue)ワークショップをCOMNAP年次総会2023と同時に開催する。両イベントはオーストラリア南極局の主催で、オーストラリアのタスマニア州ホバートで開催される予定(期日未定)である。

### 第37回 SCAR（南極研究科学委員会）delegate meeting（代表者会議）報告

極地研究所 中村卓司、野木義史

標記の会議が2022年9月5～7日の3日間、インド共和国のゴアでハイブリット形式により開催され、極地研・中村が日本代表として現地参加し、副代表として極地研・野木がオンラインで参加した。現地参加したのは、ブラジル、カナダ、チリ、エクアドル、インド、イタリア、日本、マレーシア、ノルウェー、ロシア、トルコ、米国、の12カ国で、オンライン参加を合わせると加盟45カ国のほとんどが参加したほか、IUGG、IUGS、URSIなどのユニオンメンバーからの参加もあった。重要事項としては、ルクセンブルクが準加盟国として認められ、46番目の参加国となった。4名中2名空席となった副会長は、推薦が会議までに十分に集まらなかったが、一人目はチリの Marscelo L. Cartes に無投票で決まり、二人目は2名の候補の中からトルコの Burcu Özsoy が投票で選出された。また前会長の Steven Chown に名誉会員の称号を付与することが認められた。その他、物理学、地学、生命科学の各 Science Group および Standing Committee 等の各グループのレポートが全て承認された。2028年の総会はブルガリアのソフィアに決まった。また、今年2022年の Open Science Conference の報告や、2023年に開催時期を遅らせたニュージーランドで開催予定 SCAR 生物シンポジウム、2025年にチリで開催予定である SCAR 地学シンポジウム等も紹介された。この他の重要事項として2023年～27年の Strategic Plan の案が紹介され、今後小グループで年内を目処に修文し、最終調整を行うこととなった。また、物価高騰による財源の圧迫への対応について財務担当副会長から報告があり、2026年以降の加盟料の改定について3通りの案が示され、各加盟国の意見を聞きつつ改定方法を定めることとなった。なお、この他、次期 IPY（国際極年）について議論され、2032／33年とすること、単年の事業とせず2032／33を結果創出の目標年にするべく、数年以上にわたる実施とすること、などを SCAR の意見として今後 IASC など関係組織と調整することとなった。次回の SCAR 総会は2024年にチリのプーコン、2026年はノルウェーのオスロで開催される。